
ゼロの使い魔 ～二人の使い魔！？～（仮）

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ～二人の使い魔！？～（仮）

【Nコード】

N3862M

【作者名】

琥珀

【あらすじ】

ゼロのルイズは使い魔召喚でありえない事を起こしてしまった！
なんと、使い魔は異世界に住む人間だった！！
しかも二人…。

ゼロと呼ばれた彼女に二人の使い魔
。三人の運命は
???

ツバサ（原作）とゼロの使い魔（アニメ＆コミック）のクロスオーバー作品です。
アニメとコミックが混ざったものですが、大目に見てやってください。
オリジナルの話も書いていきたいと思っています。

ブローグールイズside

美しい草原の中に、綺麗な創りの建物がある。
そこは、トリステイン魔法学院

ここは学院の寮。

その中の一部屋で、ある少女が眠っている。

その少女の瞳が、朝日によって開かれた。

少女は眠そうに髪をとかし、ブラウスと黒のスカート、
黒のハイソックス、黒のマントを身に付ける。

この学院の制服だろう。

最後に、杖を手にとった。

「皆さん。二年生への進級おめでとう。」

と女性の先生の声が響いた。

「今年度からこのトリステイン魔法学院に赴任しました、ミセス・
シュブルーズです。」

属性は土。二つ名は赤土のシュブルーズ。

これから一年間、土系統の魔法を皆さんに講義します。」
先生がそう説明する間、赤く長い髪の女性と、銀髪の男性が何か喋っている。

「さて皆さん。魔法の四大系統は？」
シユブルズ先生が質問をしてきた。

すると、金髪のバラを持った少年が「あ、は」と言って立ち上がった。

「火、水、土、風の四系統です。」

そこまで言つと、

「そしてなんたる奇遇！僕の属性もミセスと同じく土。

二つ名を青銅の、ギーシュ・ド・グラモンと申します。お見知り置きを。」

と、腕を広げ、大げさに自己紹介をする。

隣の女性徒は呆れた顔をした。

「よろしく。ミスター・グラモン。土は万物の組成司る、重要な魔法。

それをまず、知ってもらつため、基本である錬金の魔法を覚えてもらいます。」

そう言つて三つの石を取り出すと、杖を傾け、真剣な顔になり、呪文を唱えた。

「レル・イン・ヤーナ」

すると石がカタカタと動き、黄金の色に変化した。

「おおー！」

と、生徒から歓声があがる。

「そ、それつてゴールドですか！？」

先程の髪の赤い女性が身を乗り出して聞く。

しかし、

「いいえ。真鍮です。」

と聞くと、

「な〜んだ…」

と言つて、席に座つた。

「では、誰かにやつてもらいましょうか」

そう言つて先生は当てる生徒を探す。

そして、一人の生徒を見つけた。

「では貴女。その貴女」

生徒がざわつく。

「ええ!?!」

という声がある。

「…え?」

当てられた生徒

先程の少女は、小さく反応した。

「名前は?」

「ルイズ」

そう言つて席を立つと、

「ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールです。」

と自己紹介をした。
すると、

「あの〜、先生…」

と手を挙げる生徒がいた。

「何か?」

「その〜止めておいた方が…」

周りが「うんうん!」と頷く。

「危険です!ルイズがやるくらいならあたしが!」

赤い髪の女性が叫ぶ。

それにルイズはムッてなつた。

「危険？錬金の何が危険だというの？」

ルイズがプルプルと震える。

そして、

「やります！やらせて下さい！」

と叫んだ。

すると、周りが怯えた…。

「よろしい。」

ルイズが前に立つと、皆、机の下に隠れたり、青髪の少女は教室を出ていった。

「ルイズ！やめて！」

「黙って、気が散るから」

「うう…！」

「錬金したい金属を思い浮かべるのです。」

ルイズは頷く。

そして、机をかざすと、

「レル・イン・ヤーナ」

と唱えた。

すると石は光を放ち…。

「今年度も何事も無く無事始まったの」

「ええ。何よりです。」

年寄りのお爺さんと若い女性が会話する。

「学院長として、これ以上の事は無い。」

お爺さん　学院長はそう言ってタバコ（？）を吸う。
それを女性は魔法で取り上げた。

「ふー。やれやれ…」

「健康管理も秘書の勤めですわ。オールド・オスマン」

「年寄りの数少ない楽しみを奪おうというのかね？ミス・ロングビル」

オールド・オスマンはそう言つて、ミス・ロングビルの尻を触る。

「お尻を触るのはやめて下さい。」

「…！はれーほほー」

「都合が悪くなるとボケたフリをするのもやめて下さい？」

「おお！時に明日は二年生の使い魔召喚の儀式じゃったの」

「…ちつ、クソジジイ…」

ミス・ロングビルはボソツと言った。

するとどこからかネズミが現れた。

「使い魔は一生のしもべであり、友であり、そして、目であり、耳である。」

我が使い魔、モートスグニルよ。お前とも、長い付き合いじゃのう。

お、そうか、白か。純白とな！」

ミス・ロングビルがビクツと反応した。

「んー？ミス・ロングビルは白より黒が似合うと思うのじゃが…。
そうは思わんか？」

「オールド・オスマン？今度やつたら王室に報告します！」

「んん！？かー！！」

オスマンはカッと目を開いた。

「たかが下着を除かれたくらいでカッカしなさんな！そんな風だから婚期を逃すのじゃ！」

その言葉にミス・ロングビルは顔を真っ赤にした。

そして、オールド・オスマンの事を蹴る。

「あた…、ごめん…。もうしない…。ほんと…。許して…」

ドカ　　ン！！！！

「ん？」

「今のは？」

「おそらくまたあの娘ですわ。」

「あのヴァリエール家の三女か…」

教室にもくもくと煙が立ち込める。
ルイズはボロボロになっている。

「……だから言ったのよ！」

そう怒鳴られるが、

「ちよつと失敗したみたいね。」

ルイズは顔を拭きながら言う。

「どこがちよつとだよ？」

「今まで成功の確率ゼロじゃないか！」

「ゼロのルイズ！」

ルイズは何を言われても平然としている。

そして、目を回して気絶している、ミセス・シュブルーズを見た。

ある部屋から出て階段を降りると、赤い髪の女性などの、女生徒がいた。

「ねえどうだった？また反省室？それともいよいよ退学…なんてね。」

「アハハハハハッ！」

「…」

ルイズは静かに階段を降りていき、

「おとがめは無しよ」

と言った。

「え！？どうして!？」

「生徒達が止めたのに、あたしに魔法を使わせた先生にも責任があるって…」

ルイズがそう言うと、

「「ぷっ!!アハハハハハッ!」」

「ちよつと調子が悪かっただけよ！」

「いつも調子が悪いんだよねー！未だに二つ名も持てない、ゼロのルイズは！」

「うるさいわね！」

「明日が見もののね？？どんな使い魔を召喚してくれるのやら…」
ルイズはそう言われて女性達を見た。

「…？」

「わたし、召喚魔法、「サモン・サーヴァンド」だけは自信があるの！」

「え！？」

「見てなさい！アンタ達全員でも及ばない程、
神聖で、美しく、そして強力な使い魔を呼び出して見せるわ！」
ルイズはそう言うと言った。

ルイズはネグリジエを取り出すと、それに着替え、ベッドにダイブした。

そして、先程の事を思い出した。

『サモン・サーヴァンドだけは自信があるの！』

「言っんじゃない無かったあ…」

次の日

使い魔召喚

「いよいよ今日は召喚の儀式であります！」

これは、二年生に進級した君たちの最初の試験でもあり、

貴族として、一生を共にする使い魔との、神聖な出会いの日でもあります！」

男の先生が言う。

ルイズは杖を握りしめた。

「楽しみだわあ？ 貴女がどんな使い魔を召喚するか」

「ほっというて」

ある生徒が使い魔を召喚する。

すると、不思議な生物が出てきた。

「バグベアだ！」

「すげー」

「おおー。これはお見事」

「これで変な使い魔が来ちゃった日には、一生の恥ね」

女生徒がそう言うのと、ギーシュが近付き

「君なら、愛らしくて、魅力的な使い魔がやってくる筈さ。モンモランシー」

とカッコつける。

「フン！ 当たり前じゃない」

とモンモランシーは答えた。

「使い魔は、主人に一番お似合いのが召喚されるからねえ。さしづめ僕は……」

「次は！？」

カッコつけていたギーシュだが、その声に我にかえった。

「おっと。わたくし、ギーシュ・ド・グラモンです。」

ミスター・コルベール。このわたくしが、本学院創立以来の使い魔を召喚して……」

とぐだぐだ言っていたが、コルベールに止められ、儀式を始めた。

「常に我等を導きし偉大なる始祖ブリミルよ。

この青銅のギーシュのしもべとなりし気高き者よー！」

ゴゴゴ……と地響きになる。

「我が聖なる召喚に……答えたまえ！」

そう言つと地面から、

……巨体もぐらが出てきた。

ギーシュは目を丸くした。

「最後に来て、大物を出したものですなあ。ミス・ツエルプストー」

コルベールの言葉に

「わたくしの二つ名、微熱のキュルケの名にふさわしい結果ですわ。」

とキュルケは笑った。

使い魔のサマランダ　をなでながら。

「えー！これで全員ですか？」

「いいえ？まだ、ミス・ヴァリエールが」

「あ…」

ルイズはムツとした。

「ゼロのルイズかよ…」

「何呼び出すんだ？」

「呼び出せっこ無いでしょ？また爆発しておしまいよ！」
と周囲がこそこそ言う。

「大見得きつた以上、この子よりすごいのを召喚出来るのよね？ルイズ？」

「当然でしょ？」

ルイズは口を尖らせた。
杖をギュツと握る。

「（お願い…！）」

宇宙の果ての何処かにいるわたしのしもべよ！

「「「！？」」」

ルイズの呪文に皆疑問符を浮かべる。

「なあにあの呪文」

「ま、まあ、独自性はあるな」

「神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！

わたしは心より求め、訴えるわ！我が導きに答えなさい！」

ルイズは杖を振り下ろした。

ドカ ン！！！

「やっぱりこうなったか！」

「大丈夫かい？モンモランシー」

「あっ……」

「ん？」

モンモランシーはある方向を指差していた。
そこには……

「に、人間！？」

「それも二人！？」

「あ、でもなんか白いのもいる……」

「でも……あの格好はどう見ても平民……」

「あ、ああ。平民だね。間違い無く」

ルイズは顔をひきつらせた。

「こ、こんな奴らが、神聖で、美しく、そして強力な……」

ルイズの前には、二人の少年と、白い生物がいた

プロローグ～ルイズside～（後書き）

「な、なな…なんなのよ！この小説は！」

る、ルイズ落ち着いて！ねね？

「こ、こんな…こんな…！！」

は、はは…（汗）

「大体！私の使い魔は誰なのよ！」

えーとえーと…！

プロローグが終わったら分かるからね？

「…分かったわ。でも！早くしなさいよね！
犬~~~~~~~~！！！！」

ぎゃ　　……！！！！

ブローグ2〜小狼&才人side〜

小狼side

「おい。小狼くん、サクラちゃん」

「ファイさん！」

「黒鋼さん！モコナ」

小狼達は新しい国でサクラの羽根を探していた。

「見つかりました？」

「いや〜全然だよ。小狼くん達は？」

ファイがヘランと笑う。

しかし、サクラと小狼はあ…とため息をついた。

「わたし達もダメなんです…。」

「でも、羽根は必ず見つけます。」

「たく…」

黒鋼が頭をガシガシとかく。

「小狼、かつこいいー！」

「おれ、もう少し探してみます！」

「モコナも行くっ！」

モコナは小狼の肩に飛び乗った。

「…気をつけてね？小狼くん」

「はい。いってきます。」

小狼はにっこり笑った。

その時、サクラはなぜか、このまま小狼を行かせたら、小狼に会えなくなってしまうような…

そんな予感がした

「うーん…。やっぱり無いなあ…」

「小狼、もう暗いよ?」

モコナが少し心配そうに言う。

「…そうだね。かえ…あれ?」

帰ろうか、と言おうとした小狼の前に星の描かれた魔方陣のようなものが浮かぶ。

「なんだろう。これ…」

小狼は不思議そうにそれを見つめる。
そして目を輝かせた。

「こんなところに…! どうなってるんだろう?」

いろんな角度から観察する。
そのスピードはハンパない。

「小狼興味津々なのっ!」

「あ、これ入れそう…」

「入ってみる? 小狼」

「…」

小狼は少しだけ悩んだ
しかし…

「入ってみるよ! 危険な感じはしないしね」

小狼はニコツと笑った。

小狼は不思議なものには目がないのだ。

小狼は魔方陣(?) に手をつけ、入って行った。

「(すごい…!)」

「小狼、真っ暗だよ?」

「うん…え！？」

「ああっ！？」

「出入口が…っ！」

なんと、出入口が消えてしまった！

唯一の出入口が…。

「でもモコナ」

「なあに？小狼」

すると小狼は奥を指指した。

「道は続いているから、出られるかも知れない。何もしないよりは、進もう。」

「うんっ！歩こうっ！」

「（実際歩くのはおれただけだけど…）」
と小狼は苦笑した。

才人 side

「ふあ〜あ」

才人は大あくびをした。

「学校が終わったら次は塾か〜。かつたるいな。ネットやりたい〜。」

と才人は愚痴をこぼしながら塾へと向かう。

「毎日が平凡な高校生活にも飽きちゃったなあ。」

何か「あっ！」と驚くようなこと起きないかな
そんな事を言っていると、

「あっ！？」

才人の前に星が描かれた魔法陣のようなものが現れた。

「な……何だコレ　！？突然道の真ん中に……！おもしれー！何だ何だ……！？」

才人は嬉しそうにそれに近づく。

「これ…中に入れそうだな。特に危険はなさそうだし入ってみるか…」

そう言つて手を付くと、ずつ　と吸い込まれていく。

「お……？おおー！」

ずずつと才人は吸い込まれた。

「なーんだ真つ暗で何もないじゃん。つまんねー……」
そんな事を言っている……

フッ

「（え……？出入口が消えたー！！アレ……！？う……うそだろ！？どうしたらいいんだよー！！）」
混乱に陥るかと思いきや……

「（うーん。まっ……どっかに出られるだろ）」
と才人は軽く考え、また歩きだした。

プロローグ2 小狼&才人 side (後書き)

「なんか…俺の方がバカっぽくない？」

そんな事ないよ

「そ、そうですね！」

小狼は元々賢いから才人がバカに見えるだけだよ。

「そうですね！？」

「なんだと琥珀！！！」

えー？だって才人は普通のへーぼんな高校生で、

小狼はサクラの為に一生懸命に、命をかけて異世界を旅する
十四歳の少年…

違いすぎでしょ

「うつ…！！」

「おれはサクラ姫を救いたいだけです。
だから、別にすぐはありません。

自分のやりたい事をやっているだけですから。」

「すげー…」

小狼は自惚れしないもんねー

ホントに偉い

「そっそんな事は！才さんだって、つまんないと思っていても
きちんとやっているんですから、偉いです！」

「そ、そうか…？そうかな？えへへ…」

…年下に気を使わせてどーする

「なっ！お前に言われたく…！」

わたしは今十三歳だもん！

「くっそー！」

「ま、まあまあ…」

契約

「あんた達…誰？」

ルイズは訝しげに尋ねた。
しかし、

「（え…？なんだって？）」

「（え？なんて言ったんだ？）」

才人と小狼には通じない。

ちなみに、モコナはまだ気絶している。

二人は体を起こした。

小狼はモコナを抱えながら。

「（どこだ？ここは…）」

と才人はキョロキョロする。

小狼は、

「（ここは…？まさか次の世界…！？）」

と考え、少し顔が青ざめた。

「言葉が通じないの？」

ルイズはやはり訝しげに言う。

「（言葉が…モコナがいるのに…！）」

小狼がそう考えていると、

「どこの平民？」

とルイズが尋ねた。

「（英語？じゃねーな…。それに…）」

才人は辺りを見回す。

するとキュルケが歩いて来た。
笑いながら。

「お…大見得きつただけの事はあるわね？まさか平民を呼び出すなんて」

「…クスクスクスクス」

周りがクスクスと笑い、ルイズはムツとした。

「ちよつと間違えただけよ！」

とルイズはキュルケに怒鳴るが、

「さすがゼロのルイズ！期待を裏切らない結果だなあ」

「…アハハハハハ！」

才人はそのようすを不思議そうに見ているが、小狼は、

「（なんだ？この人が笑われている？どうして？）」

と考えを巡らせている。

才人は我慢出来なくなったのか、

「おい！ちよつと…！」

と言う。

「うわぁっ！」

小狼は隣の男の人がなんて言っただかはわからないが、いきなりだったので驚いた。しかし、

「うるさい！」

とルイズに怒鳴られて、二人共、肩をすぼめた。

「ミスター・コルベール！」

「なんだね？」

「あの…もう一度召喚させて下さい！」

ルイズは懇願する。

でも、やはり、

「それは出来ない」

コルベールは首を横に振った。

「え…っ？なぜですか？」

「この儀式はメイジとして一生を決める神聖なもの。」

やり直すなど、儀式そのものに対するぼうとくですぞ？
君が好むと好まざるとに関わらず、彼等は君の使い魔に決まったのです。」

才人と小狼は訝しげな顔をした。

「（何しゃべってんだか知らないけど、着てるもんといい、こいつらかなりヤバイぞ？）」

「（な、なんて言っているのかわからないけど…
なんかまずい気がする…！）」

ふいに才人と小狼はお互いの顔を見た。

「（こいつも巻き込まれたのか？

なんかこいつも変な格好してるけど、常識は持ってそうだな…）」

「（この人も気が付いたらここにいたのかな…？

周りの人と服が全然違うし…）」

才人はとりあえず小狼にも言葉は通じないだろうが

ジェスチャーなら…と思い、人がいない方角を指差した。

小狼はこくと戸惑いがちに頷く。

いいのかな…？と思いながら。

そして四つん這いで移動をする。が…

「ぐえっ…」

「うわっ…」

ルイズは二人の服とマントを引つ張った。

「でも平民を使い魔にするなんて、聞いた事ありません！」

ルイズがそう言うと、周りがまた大笑いした。
ルイズはまたムツとする。

「平民であろうと、なんであろうと、
例外は認められませんか！儀式を続けなさい。」
「ええー！？これらと…？」

ルイズは泣きそうになりながら言うと、才人を杖でつつく。
小狼はそれを見て、つい、

「大丈夫ですか…？」

と才人に聞いた。

言葉はわからないが、小狼はなんとも分かりやすく、才人は

「心配してくれてるのか…」

と嬉しくなった。

「早くしたまえ！でないと、君は本当に退学になってしまいますぞ
？」

「そーだそーだ」

ルイズは諦めたようにため息をつく。

「分かりました…」

そう言うと、才人と小狼をキッと見た。
才人と小狼は後退りした。

「なんだよ!？」

「え?え?」

ルイズは怒ったように二人に近づく。

「いいぞールイズ!」

と声がする。

「ヒューヒュー」

という声もした。

ルイズは顔を赤くして言った。

「感謝しなさいよね。貴族にこんな事されるなんて、普通は一生無いんだから!」

そう言つと杖を構えた。

「はあ?」

「えつと...」

「...我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

そう言つと身を屈める。

「五つの力を司るペンダコン。この者達に祝福を与え、私の使い魔となせ。」

そう言うと、才人に顔を近づける。

才人は頬を赤くして焦り、小狼も顔を赤くしている。

「何する気だよ!？」

「良いからじつとしてなさい!」

ルイズはそう言うと、また 顔を近づける。

「ちょ、ちよつと、ちょ、な、

おい…いや、ちょ、ちよつと…。まっおい、ちよつ」

才人の唇に、ルイズの唇が重なった…。

ルイズは離れると、今度は小狼の方を向く。

小狼は赤くなって固まっていた。

ルイズはまた顔を近づける。

それに小狼は我にかえた。

「え、あっあのっ!ちよつ、まっ…ちょ、あの…!んっ」

そして、また、唇が重なる。

小狼は今まで以上に真っ赤になってしまった。

ルイズが小狼から離れる。

「うん。コントラクト・サーヴァントは、無事、終了しましたな。」

才人は我にかえた。

二人はバタリと倒れ、気絶した…。

契約（後書き）

「「「……」」」

あの…皆さん？

「なんなのよこれー！」

「ぐわー！」

「は、恥ずかしすぎます…／／／／」

あ、もしかしてきs

「「「言うな　　！！！」」」

どかーばきーぐしゃー！ガキッ！ドッカ　ン！

「あ、琥珀気絶しちゃった」

「ああ！す、すみません！」

「いいよ！こんな作者！」

「え、ええ！？」

「そーいえば小狼って初心だなー」

「え、ええ！？」

「ま、確かにそうね」

「ええええ！？」

「ま、十四歳じゃしょうがねえか」

「ええええええ！？」

「とにかくあんたたち！私の使い魔になったんだから
しっかりしてよね！」

「へーへー」

「はい！」

使い魔

「もう！なんで気絶すんのよ！」

ルイズは気絶した二人を見て言った。

「（誰かにレビテーション頼まないといけなくなっちゃったじゃない！）」

ルイズは悔しそうに拳を握り締める。

「…お願い…。誰か、レビテーションを使って…！」
「僕がやるっ」

ギーシュが杖を振り、二人を浮かせた。

才人と小狼（とモコナ）はルイズの部屋のわらの上で眠って（？）いる。
しかし、ハッと才人と小狼の目が覚めた。
がばっと起き上がる。

「はあ…はあ…」

才人が怖い夢でも見たように呼吸する。

「なんだ？今の夢って…」

「今のつて…一体…」

「「夢じゃない！」」

才人と小狼は同時に叫ぶ。

お互いがいるという事は、夢ではない、ということだ。
二人は部屋を見渡した。
すると

「やっと目を覚ましたようね」

「いいっ？やつぱり夢じゃねえ！」

「あ…さっきの…」

「胃が痛くなるほど悩んだけど、
諦めて貴方達を使い魔にすることにしたわ。
光栄に思いなさい。」

才人と小狼は立ち上がった。

「一体俺はどこに拉致されたんだ！
俺を家に帰せ！帰さねえってんなら…！」

才人が喚く。

小狼は

「（通じないと思うけど…）」

と思った。

しかし、次の瞬間、二人は顔を赤くした。

ルイズが着替えを始めたのだ。

そして、脱いだ制服を才人と小狼に投げた。

「ぶっ！」

「わっ…と…」

才人は顔面キャッチし、小狼は手で受け止めた。

「それ洗濯しといて。言葉がわからなくても、使い魔なんだからそのぐらい分かるでしょ？」

「（これをどうしろと…？…！！）」

小狼はルイズの格好に気付き、後ろを向く。

才人は顔から服を取ると、ルイズの格好を見て、また服を顔に押し付け見ないようにした。

「主人の命令もわからないの？命令すら通じないなんて…犬以下だわ」

ガクツとルイズは落ち込む。

「ふっ服を着てください　　！！」

「おっおい！色仕掛けで何しようってんだ！つかお前誰だよ」

「あーもー！うるさい！それもピーピー吠えてばっかだし…！
あ！口封じの魔法！去年教わったやつ…」

ルイズは杖を手を取った。

「えーと…、アンスル・レル・アン
直ちに沈黙をもちて、我が要求に答えよ！」

ドッカーン！！

凄まじい爆発が起きた。

才人が黒焦げになり倒れている。

小狼は大したダメージは無いらしい。

だてに炎の中に突っ込んでいった体はしていない。
モコナも守っている。

しかしルイズはお構い無しに、

「おかしいなあ〜？」

など言っている。

「…なんだ…今のは…」

「えっ？」

「あれ？」

才人の言葉にルイズと小狼が反応する。

才人がふらふらと立った。

「ちょっとばかり可愛いから遠慮してたけど、
こうなりや力づくで…！」

「分かる！分かるわ！」

「え…、今、分かるわって言ったか？」

ルイズがこくりと頷く。

「言葉がわかります！」

小狼が嬉しそうに言った。

「何か言いなさい」

「なんだよ。皆、日本語喋れんじゃねーか」

「日本語？えーと…」

小狼が日本語に反応する。

しかしルイズは、

「どうということ？沈黙の呪文だったのに…。
まーた失敗…。あんた等、名前は？」

「俺？名前は平賀才人だけど…」

「ヒラガサイト？」

「才人さん、ですか？あ、おれは小狼です。」

「シャオラン？」

「え？何？お前中国人？」

「え？中国人ってなんですか？」

「…」

「んな事より、俺達は何でここにいるんだよ？」

「教えて貰えませんか？」

「決まってるでしょ？」

ルイズが呆れたように言った。

「私に召喚されたのよ。使い魔として…ね」

才人と小狼は目が点になった。

「「使い魔！？」」

「使い魔って魔術師が連れてる…」

「そうよ」

その時、才人と小狼は左手に何かを見つけた。

使い魔（後書き）

「やっぱり俺がバカっぽい…」

「ば、バカなんかじゃありませんよ!」

「でも顔面キヤツチに黒焦げに…どうせ俺はモグラさ…」

「も、モグラ…?」

「シャオランはなんか節々から強いっていうのはわかるわね」

「え、えっと…」

「少しボケてるけど」

「ええ!？」

「ボケてるっつか、ゼロの使い魔にはいないタイプなんだよな」

「積極的じゃないのよね」

「なんていうのか…」

「それはおれのす、好きな人が!い、いないし!そ、その…!!」

「//」

「へーえ?好きな奴いんのかあ」

「誰よ?」

「い、いや、だから…//」

…あのー作者無視ですか?

「あらいたの」

「いたのか」

「い、いたんですか」

小狼まで!!

シヨック!

「すみません!」

いいんだよ…

どうせモグラさ…

「それ俺のセリフ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3862m/>

ゼロの使い魔 ～二人の使い魔！？～（仮）

2010年10月9日21時26分発行